

関野貞による山西・天龍山石窟「発見」をめぐって

— 大判写真集 外村太治郎『天龍山石窟』の刊行を中心に —

齋藤 龍一

はじめに

去大正七年春夏の頃支那に遊びし時、余は偶然太原縣の天龍山に於て、北齊時代の比較的大規模なる石窟を
発見し、併せて隋唐時代の優秀なる石佛多數を調査する事を得たり。此天龍山石窟は山間僻陬の地に在るを
以て、従來人の知る者少く、且造象銘を有する者僅に一處に過ぎざるにより、特に金石文を重視するの風ある
彼國學者の注意を惹く事も少なかりき。余は當時かゝる重要な石窟あるを豫想せず、其発見は寧偶然と
も稱すべかりしなり。

天龍山石窟は山西省の省都・太原の西南約40km、晋陽古城の西に連なる山中に所在し、山西省内では世界遺産で
ある大同・雲岡石窟に次ぐ規模の重要な石窟として知られる。石質はもろい砂岩で、いずれの石窟も基本的に南を
向いており、東西二つの峯にわたって合計21窟が現存している。

冒頭の文章は、大正7年／中華民国7年(1918)に天龍山石窟を「発見」した建築史学者・関野貞による雑誌『國華』
掲載の調査報告「天龍山石窟」の一節である⁽¹⁾。関野は官命による大陸調査のなかで太原を訪れ天龍山石窟の探索を行っ
ており、その第一報は発見と同年の大正7年に発表した中国調査概報「西遊雜信 一」(『建築雜誌』第384号)のなか
で示されている。関野は道なき山々を踏査し、太原はおろか晋陽の人々にも忘れられていた石窟に到達することに
成功した。関野自身は「其発見は寧偶然とも稱すべかしなり」とするが、実際には事前に『山西通志』や『太原縣志』
などの地誌により予備知識を得ていたことがわかっており、その発見は周到な準備がもたらした成果であった⁽²⁾。

天龍山石窟の重要性について、関野は次のように述べている⁽³⁾。

天龍山石窟の特色とする所は、他に稀なる北齊隋初の石窟を有せると、建築的細部を向拝に作れると、唐初
彫刻の優作を保存せること等にして、吾人始めて其他を踏査し、茲に之を世間に紹介することを得たるを喜
ぶなり。

今日、天龍山石窟の造営は東魏に開始され、北齊、隋さらには唐時代以降まで続けられたと考えられている。山
西中部における北齊・隋そして唐の造像様式を考える上で欠くことができない石窟として、また石窟の前室部では
斗拱や臺股など木造建築を再現している点も注目されている。関野の指摘は現在も踏襲されうるものであって、建
築のみならず彫刻についても卓越した鑑識眼を有していたことがわかる。

しかしながら関野の発見からわずか数年のうち、天龍山石窟は他の石窟と大きく異なる状況に置かれることにな
る。それは石窟内の主要な造像の頭部あるいは全部、壁面ないし天井部の浮彫が剥がし取られ盗まれるという事態で、
数度にわたって天龍山石窟を調査した仏教学者・常盤大定は「是の如き大破壊の行はれたるは、大正十二年の事な
るが如し」とその時期を中華民国12年(1923)と推測している⁽⁴⁾。かくして天龍山石窟の断片たる造像・壁面浮彫は
日本をはじめ欧米まで世界各地に将来され今日に至っており、当大阪市立美術館も第3窟浮彫菩薩半跏像・浮彫維
摩坐像／東魏 [6世紀中頃]【図1・2】、第1窟如来坐像頭部／北齊 [6世紀中頃]、第8窟如来坐像頭部／隋開皇
四年(584)など約10件にのぼる天龍山石窟将来像を所蔵している⁽⁵⁾。



【図1】天龍山石窟第3窟将来 石造浮彫菩薩半跏像 当館蔵（山口コレクション）



【図2】天龍山石窟第3窟将来 石造浮彫維摩居士坐像 当館蔵（山口コレクション）

一 天龍山石窟初期研究史再考

天龍山石窟について考察するにあたり、まず先行研究を把握することが第一歩となるのは当然であり、結論からいえば天龍山石窟に関する研究には二つの特徴がある。⁽⁶⁾第一は、1918年の関野による発見からわずか数年間のうちに、ここに示すような数多くの論考が集中的に発表され、大判の写真集も刊行されていることにある。

関野 貞	「西遊雑信 一」	『建築雑誌』第384号	大正7年(1918)12月
木村荘八	「天龍山石窟を見る」	『中央美術』第7巻第2号	大正10年(1921)2月
関野 貞	「天龍山石窟」	『國華』第375号	大正10年8月
常盤大定	「天龍山」	『支那佛蹟踏査 古賢の跡へ 第一』金尾文淵堂	大正10年8月
田中俊逸	「支那山西省天龍山仏龕調査通信」	『佛教學雑誌』第3巻第3号	大正11年(1922)4月
関野 貞	「天龍山石窟」	『佛教學雑誌』第3巻第4号	大正11年5月
		※『國華』第375号掲載論考の再録	
田中俊逸	「天龍山石窟調査報告」	『佛教學雑誌』第3巻第4号	
二楞 生	「田中外村兩君の天龍山石窟調査に就いて」	『佛教學雑誌』第3編第4号	
		※筆者は小野玄妙	
小野玄妙	「天龍山石窟造像攷」	『佛教學雑誌』第3巻第5号	大正11年6月
外村太治郎	『天龍山石窟』	金尾文淵堂	大正11年10月

第二は、第二次世界大戦後における研究のうち、多くが中国国外に将来された造像・壁面浮彫の原所在箇所を探り、天龍山石窟の復原をめざす内容であることにある。後者は、先述したように石窟そのものと造像・壁面浮彫が分離している現状においては当然のことと言えるだろう。

一方、長年疑問を感じていたのが前者についてである。天龍山石窟は、雲岡石窟や敦煌莫高窟、龍門石窟など現在は世界遺産になっている石窟に比べればその規模は十分の一以下であるにもかかわらず、その発見当初から多くの日本人が訪れ、多くの論考が発表されるなど、いささか天龍山石窟ブームのような様相をみせている。天龍山石窟の重要性は先に述べた通りだが、多すぎる感は否めない。そこで本稿では関野による1918年の天龍山石窟発見から今年100年を迎えるにあたり、その意義と同時代の日本人研究者達の関わりについて、大判写真集である『天龍山石窟』の刊行を中心に検討したい。

なおハリー・バンダースタッペンとマリリン・リーは天龍山石窟に関する共著論考において、典拠は示さないものの1908年にドイツの建築家で中国建築の調査を行ったエルンスト・ベーシュマン、次いで1910年にアメリカ・フリーア美術館にその名を残す実業家でコレクターのチャールズ・ラング・フリーアが天龍山石窟を訪問したと記している。この指摘が妥当であれば天龍山石窟をめぐる近代史は大きく書き改められることになるが、現時点での確度は低く、本稿では従前の関野発見説を採用している⁽⁷⁾。

さて時系列にそって各論考の特徴を概述していくことにする。

先に示したように、関野による天龍山石窟発見の第一報は「西遊雑信 一」においてである。この論考は建築学会の会誌『建築雑誌』に大陸における調査のあらましを整理し寄稿したもので、そのなかの第二章「二、天龍山石窟」でさりげなく天龍山石窟を見つけ出したことに触れながら石窟の概要を記しているにすぎない。ここで「太原は、塚本博士曾遊の地或は既に此石窟を一見せらしやを知らざれども余の淺聞實際其處を踏むまではかゝる遺跡の存在せるを知らざりしなり」と述べており、この時点では厳密には自らが「発見」したという確証を得ていないことがわかる⁽⁸⁾。

それから3年後に発表された画家・随筆家の木村莊八による「天龍山石窟を見る」は、調査記ではなくスケッチ旅行の感想記である。木村は「S氏」と共に天龍山石窟を訪れたと記しているが、早くも大正10年(1921)の段階で比較的容易にたどり着くことができたのは驚きである。

そして同年8月、関野による正式な調査報告と称すべき「天龍山石窟」が『國華』に掲載された。本稿冒頭にその一節を示したが、調査期間がごく短かったとは思えないほど充実した内容である。そしてこの時点に至り、自身が天龍山石窟を発見したと明確に述べている。なお、まず建築学会の『建築雑誌』における調査概報記において特段目立たせることなく石窟の発見について触れ、数年後に美術史雑誌である『國華』にその本報告を掲載するという展開は、伊東忠太による雲岡石窟の発見とその後の報告手順とまさしく一致している⁽⁹⁾。

関野に次いで天龍山石窟を調査したのが常盤大定である。大正9年/民国10年(1921)、常盤は50歳を過ぎはじめて中国大陸に渡った。その動機として「予は長年の間、支那佛教史を講じて居るが、まだ一度も親しくその地を踏まずして、之を講ずるのは、何としても靴を隔てゝ痒を搔くの感あるを免れぬ。」と述べている⁽¹⁰⁾。およそ100日に及ぶ最初の調査のなかで同年10月に天龍山石窟を訪れている。帰国後にはすぐさま調査日誌兼報告書とも称すべき『支那佛蹟踏査 古賢の跡へ 第一』を刊行しており、「天龍山」の項目は次の一文で始まっている⁽¹¹⁾。

大同雲岡の石佛寺は伊東博士の発見にかゝり、天龍山の石窟は関野博士の発見にかゝる。発見はしても、時間と資金の爲であらう、雲岡は却つてシャヴンヌの研究によつて世界的になつて居る。天龍山も他日そんな運命になるかも知れぬ。何とかしたいものである。

同書は訪れた寺院や史蹟を調査の行程や雑感と共に概説するものだが「天龍山」の項目のみやや異質で、上記の通り個人名を挙げながら大同・雲岡石窟の発見とその後の反響に関する違和感を述べ、天龍山石窟についての危惧を表明しているのが大きな特徴である。

翌年の大正11年(1922)4月、『佛教學雑誌』に田中俊逸「支那山西省天龍山仏龕調査通信」が掲載された。同誌は仏教文学会が刊行するもので、小野玄妙が編集を担当し金尾文淵堂を発行元とした雑誌である。田中俊逸(萬宗)はその著書『運慶』でも知られる研究者であり、後述する大判写真集『天龍山石窟』の調査・撮影にあたった3名のうちのひとりであり、本稿は3月18日付けで小野にあてた書簡を活字化したものである。この中で田中は、自らの調査・撮影について次のように自負を述べている。

天龍石窟は、関野博士の発見にかゝり、常盤博士の照介に依つて、貴下の御發意よりして望月先生の御賛成を得て、吾々が調査出来ることとなり、之れより天龍山は小なりと雖も、世界的に發表し得ることと相成申候。

(中略)又他の人と雖も、天龍山は吾々以上否吾々と同じ丈けでも踏査する人は恐らくなからうと存候。

そして『佛教學雑誌』の翌号(第3巻第4号)は天龍山石窟特集で、まず前年に発表された関野の『國華』掲載論考を再掲し、さらに田中による長文の「天龍山石窟調査報告」が掲載されている。田中による調査の最大の成果は、関野が到達できなかった石窟を新発見し、その上で新たな天龍山石窟の窟番号を付したことにある。今日でも基本

的に田中による窟番号に準じて編号されており、きわめて重要な調査であったことがわかる。

さらに二楞生こと小野による「田中外村兩君の天龍山石窟調査に就いて」が付されており、田中らによる天龍山石窟調査・撮影に対し賞賛を送っている。ただし興味深いことに小野は同時に次のようにも述べている。⁽¹³⁾

常盤大村兩氏の踏査された區域は、相當に其の範圍が廣く、將來された研究材料も、色々な方面に及んで居る。處で今田中外村兩君等の行つて來た天龍山石窟の調査は、只天龍山其の者一ヶ所に限られて居るけれども、其の調査が徹底的に遂行されて居るだけに、常盤博士等に依つて得られた調査研究とは、特殊な意味に於て學界を利益する事と信ぜらる。(中略)

一體わが學界の先輩諸氏が支那に見學せらるゝ事は、殆ど年々であつて、相當に研究も發表されて居るのである。が併し其れは一の廣い範圍の所を、ずつと一通り見物して來らるゝと云ふ位のもので具體的に今回の様に、一ヶ所を精密に調査して來られた例は殆んど無い。

小野は常盤らによる研究方法に対して異を唱えており、広域調査ではなく各石窟や史蹟について個別の調査研究をすすめるべきだと持論を展開している。

さらに『佛教學雜誌』翌号(第3巻第5号)には小野の「天龍山石窟造像攷」が掲載されている。天龍山石窟を訪れていない小野ではあるが、ここでは地誌や先行研究を踏まえながら北齊頃における僧侶の動向を含めて論じ、最後に各窟の造営年代にまで言及する意欲的な論考である。

このように関野による天龍山石窟発見から間もない論考は、数は多いもののその実情はわずか数人の日本人研究者が重ねて発表したものであった。そのなかでも関野と田中による充実した調査報告により、天龍山石窟は早い段階でその全容が知られることとなった。発見者である関野の功績は今日でも高く評価されているが、田中による新石窟発見・調査という大きな成果はあまり顧みられていないように感じる。その要因は次に述べる大判写真集『天龍山石窟』の刊行事情にあると考えている。

二 大判写真集『天龍山石窟』の刊行

関野貞による発見からわずか4年後の大正11年(1922)10月、大判写真集・外村太治郎『天龍山石窟』金尾文淵堂が刊行された(以下、『天龍山石窟』と称する)。なぜ本書が重要なのかといえば、先述したように大正12年/中華民国12年(1923)頃に石窟内の主要な仏像の頭部あるいは全部、壁面ないし天井部の浮彫が剥がし取られ盗まれた天龍山石窟の旧状を伝える唯一の写真集だからである【図3】。そのため刊行から90年以上経った現在においても、その図版を参照する必要があるのが天龍山石窟研究の特殊性といえるだろう【図4】。このような写真集ではあるが、



【図3】天龍山石窟第3窟東壁南端 旧状
『天龍山石窟』図22



【図4】天龍山石窟第3窟東壁南端 現状
筆者撮影

しかしながらそれがどのような意図をもって、どのような経緯で刊行されたのかはほとんど検証されていない。そこでやや煩雑にはなるが、『天龍山石窟』の詳細について当時の言説・資料をもとに明らかにしたい。

1 構成と体裁

その構成は、まず冒頭「天龍山石窟」の題記を内藤虎次郎(湖南)が揮毫している。序文は順に、関野貞、『大正新脩大藏經』の刊行に尽力した仏教学者・高楠順次郎、常盤大定、『望月仏教大辞典』の編纂で知られる仏教学者・望月信亨の4名からなる。そして図版は80カットとかなりの枚数であり、最後に小野玄妙の跋文がある。本書の大きさと豪華さは特筆すべきであり、各頁は綴じられておらず厚手の紙に高精細な図版を各紙各1図印刷し、これらを大きな帙に納める装丁である。

奥付には、価格の金三十八圓、著作者として支那北京崇文門大街・外村太治郎、発行者金尾種次郎、瑠璃版印刷者大塚稔、活版印刷者として島連太郎、松本兼吉、そして發兌元金尾文淵堂と記されている。外村太治郎は北京・東華照相材料行の主人で、瑠璃版すなわちコロタイプ印刷を担当する大塚稔は美術印刷で著名な大塚巧藝社の創設者、島連太郎は書籍雑誌の活版印刷で有名であった神田・三秀舎の社主、そして刊行元である金尾種次郎の金尾文淵堂は採算を度外視した良書や豪華本の刊行で知られる。当時の最高レベルの印刷・出版社により刊行されたことがわかる。なお3月に写真撮影しその後4月上旬に日本へ帰国、8月頃に序文の執筆、10月には刊行というかなり忙しい工程であったようだ。

『天龍山石窟』は日本で刊行された中国彫刻・石窟関連の写真集としては早い段階のもので、当時のヨーロッパにおける大判写真集の先行例としては、雲岡石窟の画像を掲載したシャバンヌによるMission archéologique dans la Chine septentrionale,1909-15、ペリオによるLes Grottes de Touen-houang,1920-24があり、日本では1年前の大正10年に北京・山本写真館(照像館)撮影による新海竹太郎・中川忠順『雲岡石窟』が刊行されているが、それらと比較しても遜色ない豪華な装丁である。なお『天龍山石窟』はこれらと異なり、石窟の概要はおろか各図版の解説などが一切なく、あくまでも純粋な写真集であることが大きな特徴であるが、この問題については後ほど検討する。

2 調査・撮影の経緯

調査・撮影の経緯について、関野の序に次のようにある。

余の調査は次第に我學界に反響を及ぼし、其後常盤、太田、木村、諸氏の探検となり、佛教史上、藝術史上、漸く其の價値を闡明せられたのみならず遂に小野玄妙氏首唱のもとに望月信亨氏の賛助により田中俊逸、外村太治郎兩氏の完全なる調査が行はるゝことゝなつたのは喜ばしきことである。

さらに小野の跋文、および前掲「田中外村兩君の天龍山石窟調査に就いて」などにより、その詳細な経緯を知ることができる。

①調査・撮影の企画 外村が小野宅を来訪した際に山西・五台山参詣の道程について尋ねたところ、近いうちに北京に戻るのを太原まで行って調べてみましょうという話があった。しかし外村が去った後、相当の費用を要するのにそれだけで帰るのは無駄なように思えてきた。そこで天龍山石窟を十分に調査し写真を全体的に撮るのであれば、太原にまで行ってもらうことが無駄足にならずにすむと思ひ至った。そのことを田中に相談したところ、早速快諾して外村の後を追ってくれ、外村を助けてこの私の願いを実行に移してくれた。参加者は、外村と田中のほか技師の平田饒が加わった3名であった。

②調査・撮影の時期 3名が太原に着いたのは大正11年/民国12年(1922)3月で、その後天龍山に至り、大変な苦勞をしながら約1週間にわたって石窟の調査及び撮影を行った。本書に掲載の図版はすべてこの時に撮影したものである。

このように、参加3名のうち最初に話を持ちかけられたのは外村であった。後に田中は「天龍山石窟探検思ひ出の記」を発表し、調査の過酷さを詳細に述べている。それによれば、まず太原に着いた日は山西を支配する軍閥・

閻錫山の警戒下に何もすることができず、汚れた現地の服に変装し天龍山の麓にあたる晋祠に至った。そこから撮影機材・登山用具・食料などを雇った10名に運ばせ、総勢13名で天龍山に徒歩で登ったという。同じく田中の「支那山西省天龍山仏龕調査通信」によれば、天龍山探検の三悪苦難として、石窟付近に猛獣が生息していること、石窟に入るには断崖絶壁を登攀する必要があること、石窟麓の天龍寺は咬む犬を19匹飼っており一人でその付近を歩くことができないことをあげている⁽¹⁵⁾。

3 序文のメッセージ

小野が企画した調査・撮影そして刊行へといたる一連の原動力、あるいは当時の学界における背景を探るヒントが4名による序文に隠されているように思う。関野の序文は次のように締めくくられている。

燉煌の石窟はペリオ氏により、雲崗、龍門の遺蹟はシャヴンヌ氏より既に世界的に宣傳されたが、天龍山の石窟は幸に田中、外村兩氏の努力により、其真相を廣く内外に紹介して世人の研究に資することゝなつたのは實に我學界の大慶事である。余が當時日程の都合と準備の不足の爲め調査を完ふすることが出来なかつた部分が、兩氏によりて更に完全に遂行せられたのは實に余一人の幸福のみではない。余は東洋人の當に爲すべき研究が往々歐米人に先鞭を着けらるゝを見て、毎に殘念に思つてゐたから、今回兩氏の此事業に對しては特に世人と共に滿腔感謝の意を表せんと欲するのである。

そして常盤の序文も関野と申し合わせたかのように、同様の主張をさらに具体的に述べている。

猶、伊東博士の發見に係る大同雲崗が外人によつて世界的になつた如く、この天龍山も、同一の運命を繰り返すでは無からうかと、記して置いた所が、今度外村氏が一切の準備を調べ、大膽な企圖を試みて、首尾よく、天龍山石窟の全部を吾人の前に展開する様にしたのは、予の希望を満足せしめたものといはねばならぬ。

そのほかの2名も、高楠順次郎は「洞窟寺院の發見、研究、發表、俱に我國の學者に成りしものは唯この天龍山寺あるのみ」とし、望月信亨は欧米の研究者による成果を列記した上で「東洋の研究は當然東洋人がなさねばならぬ所である」と記している。

このように常盤、関野をはじめとする建築史および仏教・仏教史研究の著名な研究者が示し合わせたように、欧米の研究者による東アジア調査とその成果について過剰なまでに拒否感を表明している。共通しているのは東アジアここでは中国の研究になるが、東アジアの研究者、具体的には日本人研究者が先んずべきという強迫観念のような思考である。特に常盤は先の『支那佛蹟踏査 古賢の跡へ 第一』「天龍山」で示した危惧に対する自答のように、本書を「予の希望を満足せしめたもの」と述べている。また関野がこれまでの「西遊雜信 一」および『國華』「天龍山石窟」と異なり、常盤と同様な「余は東洋人の當に爲すべき研究が往々歐米人に先鞭を着けらるゝを見て、毎に殘念に思つてゐた」という所感を述べている点も注目すべきで、常盤の主張が公私ともに密接な交友のある関野に肯定的に受け入れられたことを示すものともいえるだろう⁽¹⁶⁾。ここに本書の刊行が、天龍山石窟の紹介を通じ東アジアの仏教・建築・美術・考古各分野の研究進展に寄与する目的にとどまらず、結果的に「盛んになりつつある欧米人による東アジア研究への対抗手段」のひとつとして、「天龍山石窟を日本人研究者が發見したという事実を内外に広く知らしめる」というもう一つの大きな意義を有していたことを示している。

ここで本稿に関連する主な研究者の生没年を、生年順に確認しておきたい。

Aurel Stein	1862-1943	1907年、敦煌調査
岡倉覚三(天心)	1863-1913	1893年、龍門石窟訪問
Édouard Chavannes	1865-1918	Mission archéologique dans la Chine septentrionale, 1909-15刊行
内藤湖南	1866-1934	『天龍山石窟』題記揮毫
高楠順次郎	1866-1945	『天龍山石窟』序文執筆
伊東忠太	1867-1954	1902年、雲岡石窟「發見」
関野 貞	1867-1935	1918年、天龍山石窟「發見」

大村西崖	1868—1927	1915年、『支那美術史彫塑篇』刊行
望月信亨	1869—1948	『天龍山石窟』序文執筆
常盤大定	1870—1945	『天龍山石窟』序文執筆
Paul Pelliot	1878—1945	1908年、敦煌調査
Osvald Sirén	1879—1966	Chinese sculpture, 1925刊行
小野玄妙	1883—1939	『天龍山石窟』跋文執筆

このように1860年代を中心に日本でいえば江戸時代末～明治初頭生まれが多いことがわかる。『天龍山石窟』刊行の1922年は小野を除き、内藤から常盤まで皆50代であり各学会で中心的に活躍していた時期にあたる。また常盤や小野が名指したライバルとも称すべきシャバンヌやペリオも同世代である。つまり一回り以上若い小野の企画に対し、欧米研究者の動向に大きな危惧を抱く常盤や発見者たる関野らが同調したということなのだろうか。「雲岡石窟の過ちを繰り返してはならない」という、なんとも一方的な思いがこの序文にはっきりと表れている⁽¹⁷⁾。

4 調査・撮影と刊行の背景

ここでいくつかの新たな疑問が生じる。そもそも調査・撮影そして刊行の企画は、先述したように小野が外村に五台山の道程を尋ねたことがすべての始まりであった。小野自身『天龍山石窟』刊行と同年に「天龍山造像攷」を發表しているものの、同じく山西の五台山を訪れた際にも天龍山石窟には赴いていない。実際のところ、それほど天龍山石窟に関心があったように思えないのである。また外村の後を田中に追わせる、という人間関係はどのように築かれたのかという疑問である。

それを解くカギが、『天龍山石窟』と同年である大正11年の1月刊行された『支那山西省大同石佛寫真集』である。これは雲岡石窟を撮影した焼付印画紙117枚と74頁の解説本からなるもので、奥付によれば編輯者は田中俊逸、発行者は外村太治郎であり、発行元は東華照相材料行撮影部である。つまり『天龍山石窟』の調査の前年に、田中と外村は雲岡石窟で協働していたのである。そして序文は小野が執筆しており、次のような興味深い記述がある⁽¹⁸⁾。

友人田中俊逸君が、北京の東華照相材料行主外村太治郎氏を伴ふて來宅せられ、同氏が撮影した大同石佛寺の寫眞を世間に頒布すべきことについて相談を受けた。その時私は四切大版寫眞焼付印畫そのものを低廉な實費を以て有志に頒つと云う企に對して、よそながら深く賛成の意を表したのであった。

さらに、図版解説は田中が急病のため半ばで執筆ができなくなったため、それをもとに小野が代筆を引き受け完成させたという。

このように3名の緊密な関係をうかがうことができる。田中と外村の『支那山西省大同石佛寫真集』刊行に関わっていた小野だからこそ、山西・太原に行くなら次は天龍山石窟の調査・撮影でもやってみたらどうかという発想に至ったと考えられ、田中がフットワーク軽く外村を追ったのも直近にこうした協働があつたのことといえるだろう。

5 解説のない写真集

先述したように『天龍山石窟』には図版のキャプションは付記されるものの、石窟の概要や解説が一切なく、学術的写真集としては異例である。なぜこのような構成となったのか疑問であったが、この問題を解くヒントが小野が編集する雑誌『佛教学雑誌』の広告欄にあった。それは第3巻第6号掲載の『天龍山石窟』発売広告で、これにより本書の当初刊行計画が明らかとなった【図5】。

まず当初のタイトルは「支那佛教藝術寫真集第一 天龍山石窟」で、複数冊刊行する企画があつたようだ。『佛教学雑誌』第3巻第7号などの『天龍山石窟』発売広告には、「支那佛教藝術寫真集第二 雲岡石佛寺」と次冊の予告も記載されている。そして注目すべきは、「宗教大學教授小野玄妙先生 田中俊逸先生解説」とあることで、さらに宣伝文には「今回同地より撮影し來れる四切大の寫眞八十枚に田中氏の精密な調査報告書並に小野教授の同石窟寺の造像に關する序論を添へ、美裝し改めて發行することにしたのである。」と具体的に田中の調査報告と小野の序論

文學博士 高楠順次郎先生序
宗教大學長 望月信亨先生序

宗教大學教授 小野玄妙先生解説
田中俊逸先生解説

支那佛教藝術 天龍山石窟 寫真集第一

北京東華照相材料行撮影
特製 圖版現像紙燒附寫真(永久不變色)
並製 圖版(四六四倍) 附布表裝箱入
八十葉全一卷 特價金七拾五圓
八十葉全一卷 特價金參拾八圓

支那佛教藝術の眞範は本書に依りて初めて之を窺知することを得べし
北齊並に隋唐藝術の精粹 雲崗並に龍門已上の盛觀

全世界の勢力中心たる英米と相並びて三大強國の班に列し、東洋の天地に雄飛する我が帝國は、或は軍備の一點に於ては幾分自負し得る處があるかも知れぬが、而も其の國民の文化的知識に於ても、亦果して日本帝國の日本人たる使命と自覺と尊嚴とを保持することが出来るかどうか。今や列國の視聽は政治に文學に藝術に悉く極東の天地に集注せられ、其の學術的研究は白熱的に急速な進歩を示してゐる。特に支那研究に於て其感を深くせざるを得ない。例せば英國スタイン博士の于闐、佛國ペリオ博士の燉煌、同故シヤンヌ博士の大同、獨國グリム、ウィーデル博士の龜茲、同ルコック氏の高昌といったやうに、支那要地の文化的研究の如き、既に悉く泰西學者の爲めに先鞭を着けられてしまつてゐる。地理に就ても言語に於ても研究上尤も徑捷の位置を占むる我が學界が、之に關して何等の對策を講ずること無く、殆どグーの音をも出す事能はざるは、何といふ醜態ではあるまいか。處が、今回小野玄妙氏首唱のもとに望月宗教大學長の贊助を得て、田中俊逸外村太治郎兩氏に依つて遂行せられた支那山西省天龍山石窟の調査は、規模に於て于闐、龜茲、燉煌、大同、龍門に比して小なるかもしれぬ、併かし乍ら決死の危険を冒して成功した調査の業績そのものを見れば、我國の學界では未だ何人も仕遂げ得なかつた理想的な探検であつて、それは公然と世界の學壇に推奨し紹介することの出来る極めて痛快な研究である。今回同地より撮影し來れる四切大の寫真八十枚に田中氏の精密な調査報告書並に小野教授の同石窟寺の造像に關する序論を添へ、美裝し改めて發行することにしたのである。

東洋學術の最高權威者であらねばならぬ地位にあり乍ら、而も東洋の研究を忽緒にしてゐる我が學界の爲めには大に貢獻する所あらうと思ふ。敢て同好諸君の御精鑑をお勧め申上ります。

常盤博士曰はく、大同雲崗の石佛寺は伊東博士の發見にかゝり、天龍山の石窟は關野博士の發見にかゝる。發見はしても時間と資金の爲めであらう、雲崗は却つてレゾンスの研究によつて世界的になつてゐる。天龍山も他日そんな運命になるかもしれない。何とかしたいものである。……北齊時代の藝術を有するは天龍山石窟の長所を以て、雲崗、龍門の間を補ふ事が出来る。龍門にも北齊のものがあったが、それは唯一つに過ぎぬ。天龍山のは以上の如き多くの北齊藝術を有し、之を一見して直に北魏にも異なり隋唐にも異なる氣分を味ふことが出来る。『古賢の跡』(九〇頁)

關野博士曰はく、天龍山に於ける唐時代の石窟は規模小なれども手法の精練寧ろ龍門幾多の唐作を凌駕せんとす。又之を北齊隋初の者に比すれば一見直に北魏系統の藝術が唐に入りて一大變化を來せしを知るに足るべし。之を要するに天龍山石窟の特色とす。所は他に稱する北齊隋初の石窟を有せると建築的細部を向拜に作れると隋初彫刻の優作を保存せること等にして吾人始めて其地を調査し之を世間に紹介することを得たるを喜ぶなり。(『國華』三七五號)

【圖5】『天龍山石窟』發售廣告 『佛教學雜誌』第3卷第6号

が付されることが明記されている。

一方、『佛教學雜誌』第3卷第9号に掲載の『天龍山石窟』發售廣告では内容に変化が生じている【圖6】。「支那佛教藝術寫真集第一 天龍山石窟」というタイトルはそのままだが、高楠以下序文・題記・跋文の執筆者が列記され、田中の名前はもろんのこと「解説」という文言も消えている。この時点すなわち刊行寸前に、何らかの理由で序論および解説の削除が決まったことがわかる。これに関連して田中は「私の苦辛慘憺した寫眞は歸朝の上、無斷で出版せられ、此解説書すら附さなかつたのです。」と述べており、急な方針転換があつたことがうかがえる。そのため序文や跋文にのみ田中の名が記されるというやや不自然な状況が生じてしまった。なお、この広告でも本書は「特製圖版現像燒附寫真(永久不變色)」、「並製圖版(四六四倍) 瑠璃版(四ッ判)」の二種類あると記されているが、管見の限り特製版を確認できていない。刊行間際までさらなる紆余曲折があつたのだろうか。

おわりに

『天龍山石窟』刊行の翌年頃、造像や浮彫の盗掘に伴う石窟の破壊が行われ、天龍山石窟に対する研究は事実上途絶えてしまうことになった。『天龍山石窟』刊行に際して、当初予定していた解説を省くという一件があったためか、田中の「天龍山石窟探検思ひ出の記」には小野の名前がまったく記されず、雲岡石窟そして天龍山石窟と続いた彼らの協力関係も失われたようである。日本人研究者に限って言えば、小野の持説であった特定の石窟・史蹟に対する個別研究は敦煌莫高窟などを除き、東方文化学院京都研究所の水野清一・長広敏雄による響堂山石窟、龍門石窟そして雲岡石窟の調査までほとんど本格化することはなかった。

関野による天龍山石窟の発見は、懇意の常盤が伊東による雲岡石窟の発見とその後の反響に関する違和感を述べ、天龍山石窟についての懸念を表明したことが端的に示すように、その事実のみが一人歩きし欧米対日本という東アジア研究における仮想対立軸の重要なポイントに置かれてしまった側面があった。⁽²¹⁾ そのなかで天龍山石窟に関する研究者の言説から読み取れるのは、第一次世界大戦後の日本を取り巻く状況を背景とする国家主義や植民地主義といった政治イデオロギーそのものというよりもむしろ、東アジア・中国の研究は日本人研究者が先ずるべきという強い、あるいは強すぎる自負心といえるのではないだろうか。

今日の中国彫刻研究はこうした研究者の多大な成果を基盤として存在しうるものであり、どのような思いでどのような意図をもってそれを成し遂げたのか、すなわち中国彫刻研究史の背景を明らかにすることの重要性を、関野による天龍山石窟の「発見」とそれに対する日本人の研究者の反応が示しているように思う。

※ なお本稿の論旨に則し、引用にあたっては原文通りの名称等をそのまま表記している。

註

- (1) 関野貞「天龍山石窟」『國華』第375号、1921年、46・49頁。
- (2) 関野貞による天龍山石窟踏査と中国彫刻史研究については、肥田路美「関野貞の中国彫刻史研究と石窟調査」(『東京大学コレクションXX 関野貞アジア踏査』東京大学総合研究博物館、2005年)に詳しい。
- (3) 前掲、関野貞「天龍山石窟」60頁。
- (4) 常盤大定・関野貞共著『支那佛教史蹟評解三』佛教史蹟研究会、1926年、54頁。
- (5) その破壊と将来に関しては、当時世界有数の美術商であった山中商会がどのように関与したのかなど研究者によって見解に大きな相違がある。また当時の山西を支配していた閻錫山による関与の有無など検討すべき課題が多く、この問題については稿を改めて論じることにした。
- (6) 天龍山石窟研究史については、李裕群・李鋼編『天龍山石窟』(科学出版社、2003年)、および神谷麻理子「天龍山石窟の研究-研究史と問題点」(『愛知県立芸術大学紀要』No.34、2004年)に詳しい。
- (7) Harry Vanderstappen and Marilyn Rhie, "The Sculpture of T'ien Lung Shan: Reconstruction and Dating" *Artibus Asiae* v.27 n.3, 1965, p189. なおErnst Boerschmannが1906-09年に行った中国調査の成果の一部は*Baukunst und Landschaft in China*, 1926として刊行されている。本書には各地の写真が掲載され、山西中部では太原の寺院や晋陽の晋祠、そのやや南に位置する介休の綿山摩崖寺院などが取り上げられているが、天龍山石窟については触れられていない。またCharles Lang Freerは1910-11年に最後の中国旅行として洛陽・龍門石窟や開封、杭州、そして上海、北京、瀋陽を訪れているが、その主な目的地は龍門石窟であったと考えられ、現時点では天龍山石窟に到達したという記録を見出すことができない(The Charles Lang Freer House Booklet, *A Thousand Graces: Freer's Pilgrimage to the Buddhist Cave Temples at Longmen and his Collection of Chinese Art*, 2013、および李雯・王伊悠訳『佛光無尽:弗利尔1910年龍門紀行』上海書画出版社、2014年)。
- (8) 前掲、関野貞「西遊雜信 一」629頁。
- (9) 伊東による明治35年/清・光緒27年(1902)の雲岡石窟発見は、同年にまず『建築雑誌』第189号掲載の「北清建築調査報告」の一項目「第十 雲岡の石佛寺」として報告され、その後1906年、「支那山西雲岡の石窟寺」『國華』第197号および「支那山西雲岡の石窟寺(承前)」『國華』第198号に調査報告が発表された。なお伊東と関野による石窟調査に関する論考として、勝木言一郎「雲岡石窟と天龍山石窟の発見」『アジア遊学』(No.45、勉誠出版、2002年)がある。

- (10) 常盤大定『支那佛蹟踏査 古賢の跡へ 第一』金尾文淵堂、1921年、1頁。
- (11) 前掲、常盤大定『支那佛蹟踏査 古賢の跡へ 第一』90頁。
- (12) なお同書が美術史研究者Langdon Warnerの序文を添えて刊行されるのは、田中が没した翌年である(田中萬宗『運慶』芸艸堂出版部、1948年)。
- (13) 二楞生「田中外村兩君の天龍山石窟調査に就いて」『佛教學雜誌』第3編第4号、1922年、431～433頁。
- (14) 大正11年(1922)に在天津總領事・吉田茂が外務省に提出した「在天津北京本邦輸出入商調」には、東華照相材料行の設立は大正6年、社員は経営者である外村のほか2名とある(アジア歴史資料センター Ref. B11090770400在支本邦人ノ企業及貿易調査ノ件第六卷 外務省外交史料館)。
- (15) 田中萬宗「天龍山石窟探險思ひ出の記(上)」『日本美術協會報告』第23輯、1932年、3頁。田中俊逸「支那山西省天龍山佛龕調査通信」『佛教学雜誌』第3卷第3号、1922年、439頁。
- (16) 関野と常盤の密接な交流や後に共著として刊行する『支那仏教史蹟』についての詳細な論考として、渡辺健哉「常盤大定と関野貞『支那仏教史蹟』の出版をめぐる」(平勢隆郎・塩沢裕仁編『関野貞大陸調査と現在Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2014年)、渡辺健哉「常盤大定の中国調査」(『東洋文化研究』第18号、学習院大学、2016年)がある。
- (17) そもそもシャバンヌやペリオと建築史研究者・建築家である伊東とでは研究上の方向性が異なっており、伊東にとって雲岡石窟の発見はことさら喧伝すべき事柄でもなく、小川一眞撮影による1906年の東京帝室博物館編『清國北京皇城寫真帖』刊行に関わり全図版の解説を執筆しているものの(関紀子「小川一眞の北京城撮影と帝室技芸員任命について」MUSEUM、第626号、2010年)、雲岡石窟を撮影しその図版集を刊行する必要性は持ち得なかったであろう。
- (18) 田中俊逸『支那山西省大同石佛寫真集解説』東華照相材料行撮影部、1922年、1頁。
- (19) 田中萬宗「天龍山石窟探險思ひ出の記(下)」『日本美術協會報告』第24輯、1932年、19頁。
- (20) 前掲、渡辺健哉「常盤大定と関野貞『支那仏教史蹟』の出版をめぐる」に詳しい。
- (21) 関野自身にも常盤と同様な言説がみられるが、その一方で伊東と共に中国で設立された建築研究機関である中国营造学社に関わったり(徐蘇斌「東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナリズム:関野貞と中国建築史研究」『日本研究:国際日本文化研究センター紀要』第26巻、2002年)、山西・雲岡石窟に向かう車中でたまたま同室となった中国美術研究者オズワルド・シレンと懇意になり、仏教彫刻について以降様々な情報交換をしていることが日記や書簡から明らかとなっており(大西純子「関野貞資料」にみる Osvald Siren 著 Chinese Sculpture from the 5th to 14th Century 成立の背景」『佛教藝術』第291号、2007年、および、関野貞研究会編『関野貞日記』中央公論美術出版、2009年)、中国そして欧米の研究者との分け隔てない学術交流があったのも事実である。

(大阪市立美術館主任学芸員)

